

池内紀 × 川本三郎

にっぽん そぞろ歩き

第1回 東京の味わい方



三カ月に一度、池内紀さんと川本三郎さんが誌上で「雑談」してくれます。散歩、街歩き、旅、暮らし、映画や文学と、テーマは多岐にわたるはず。第一回は、なんと大東京を見下ろす霞が関ビルの一室から。昭和四十三年竣工、日本初の超高層ビルも、ほかのエリアの超高層ビルと比べれば、もはや高いとはいえず、これも東京の変貌ぶりを示しています。街歩きをこよなく愛するお二人の「東京の味わい方」――。

天下国家を語りぬ二人が語るもの

川本 対談で思い出すのは、昔、お金のない雑誌で、詩人の清水哲男さんと連載対談をやっていたんです。野球場で野球を見て、そのあと二人で試合のこと、球場のことを話す。まとめ役もいなかったので、喫茶店に入り、原稿用紙に、まず清水さんが「清水 ○○だね」と書いたら、今度は私が「川本 そうですね」と書いて、初めから原稿にしてしまう。清水さんは熱狂的な巨人ファンで、私が阪神ファンだったので、球場

で別々に観戦したあと、喫茶店に入って試合のことをああだこうだ……ほとんど遊びですね。いまからすると、あの時代はまだのどかだったなあと思います。

池内 住居のある三鷹に、もう三十年くらい応接間がわりにしている喫茶店があって、最初のころは若い女性が三人でやっていたのが、いまでも同じ三人です。

川本 歳取ってということですか？

池内 そうそう。売り上げは以前に比べてずいぶん落ちたといえます。近頃はエキチカにきつとスターバックスとか、チェーン店系ができるでしょう？ すると、お客を取られてしまう。以前は季節ごとに休みを取って、みんなで一泊旅行してたのに、いまは年に一度だけ。街の喫茶店は、いま難しいんですね。

川本 最近個人商店が軒並み立ち行かなくなっていますものね。よく地方の商店街がシャッター通り化していると言いますが、東京にもそういうところがわりとあって、私の姉が住んでいる西武線の小平駅近くの商店街なども、けっこう店が閉まっています。

ところで、この対談、「東京」がテーマとまっているのか？

編集部 今日は東京ですが、テーマはそのつど、暮ら

し方や街歩き、映画、旅、面白い本の話などと変わるかと思いますが、すみません、要は何でもいいんです。とにかくお二人が顔を合わせたとき、どんな話をするんだらう、かと。

川本 天下国家のことは語らないけど、ただ、最近、周囲の編集者や映画会社の人たちと飲むと、皆さん、よく「自分の周りには、現政権支持の人は皆無なのに、世論調査では四割くらいの支持がある。自分たちはつくづくマイノリティだと感じる」と言うんですよ。たしかに不思議な現象だと思います。われわれの居場所が特殊なのかもしれません。三十代、四十代でも多くの人がデモに行っているし、なぜあんなに支持率が高いのか、不思議です。

池内 次の選挙から選挙権が十八歳からになりましたね。もっと早くに十八歳以上にしておかないかならなかつたと思います。それでも、やっと実現して、何か変わるような気がしますね。

川本 どうでしょう。十八歳以下がはたしていまの政権に批判的なのか、追従するのか。徴兵制になって困るのは、結局は自分たちですからね。

池内 そうなんです。こちらは、ほぼこの世の役目が